２　野　　菜

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○いちごの管理 ○暖房費の低減対策 ○たまねぎの定植 ○そらまめの定植
（１）いちごの管理	ア　電 照 いちごは短日・低温条件において休眠に入ると、株がわい化し、葉面積は小さくなり光合成速度が低下する。そこで、電照を行って厳寒期のわい化を抑制し草勢維持を図る。電照開始時期や点灯時間は、品種や生育状況により異なるが、一般には、第１次腋花房の分化後、着果負担が大きくなる 11 月中旬頃より開始し、日長延長法では連続３～４時間、間欠電照法では 10～15 分／時間程度を目安にする。過度の電照は過繁茂の原因となるため、新葉の伸長状況や葉色を確認し時間を適宜調節する。 なお、電球と株の間が近くなると照度ムラを生じ、生育ムラが発生するため、光源から適当な距離をとり、株上で 20 ルクス以上になるよう調節する。 イ 炭酸ガス施用 大気中には約 400ppm の炭酸ガスが含まれているが、この濃度を高めることで光合成が促進され、増収効果が認められる。 特に、高設栽培では土中からの炭酸ガス供給がほとんどないため、炭酸ガスの施用効果が高い。施用時期は、果実肥大期の 11 月中旬頃より始め、日の出から換気開始まで、概ね 1,000ppm を目標に行う。日中施用の場合は 400ppm を維持する。 ウ 温度管理 果実肥大期以降、土耕栽培では昼間 25℃、夜間５～７℃程度を目標に管理する。高設栽培も昼間 25℃を目標に管理するが、夜間は根圏温度（培地温度）が気温と同程度まで低下するため、架台の脚部を古ビニルなどで覆い保温するとともに、暖房温度を８℃以上に設定する。

項　　目	作　　業　　内　　容
	エ 摘果 着果負担を軽減するため、商品性の低い奇形果・小玉果の摘果を行う。品種によっては、１番果は大きいが収穫が進むとすぐに小玉になるものや、裾果でもある程度肥大するものがある。また、裾果が肥大する品種でも着果させすぎると厳寒期に草勢が低下するため、品種や草勢、着果数等により摘果程度を調整することが重要である。
（２）暖房費の低減対策	冬季にトマト、きゅうり、なすなど、概ね 10℃以上の夜温を必要とする果菜類では温度管理が重要となる。  写真１　ハウスの多層被覆（左）と暖房機の清掃（右） 暖房費は農業経営に大きく影響するため、ハウス破損部の補修等による気密性の向上、夕方早めのサイド閉め、暖房機の点検および清掃により暖房の効率化に努める。なお、ビニルの二層被覆等により保温性の向上を図る（写真１）。
（３）たまねぎの定植	たまねぎは、好適 pH が 6.4～6.8 で酸性土壌を好まない。排水の良いほ場を選び、定植までに完熟堆肥とともに石灰資材を施用して酸度を矯正しておく。この時期のほ場準備は、一旦降雨があると土壌が乾きにくいので、早めに行う。  写真２　定植直後のタマネギ 定植は、育苗日数 55～60 日で、100 本重 400ｇ程度、葉鞘基部の太さ５～７㎜の苗を用い、畝幅 120～140cm、条間 20～25cm、株間 10～12cm の４条植えとする。定植時期は、早生品種では 11 月中～下旬、中･晩生品種では 11 月下旬を目安に行う。苗は、なるべく根を切らないように掘り取り、植付け深さは 2.5～３cm 程度で、根が表面に出ず、葉の分岐点より上に土をかけないように定植して十分かん水する（写真２）。

項　　目	作　　業　　内　　容
（４）そらまめの定植	定植は、は種後約２週間で本葉３枚程度のポット苗を用い、１条仕立てでは畝幅 120cm（２条仕立てでは畝幅 150cm）、株間 40～50cm で 11 月上旬に行う（写真３）。 定植時には、根を乾かさないよう注意し、定植後は十分にかん水する。また、モザイク病の媒介虫であるアブラムシ類の飛来防止には、シルバーストライプマルチ等の利用が効果的である（写真４）。  写真３　定植適期のそらまめ苗  写真４　定植直後のそらまめ （シルバーストライプマルチ利用）

（作成　農林水産研究所）